

海外迷所案内譚 (ばなし)

第二部 [中国大陸をたずねて] 〈洛陽・万里長城編 1～3〉

色染 48 年卒 石田泰和



はじめに

旅行記となるとどうしても避けて通れないのがお隣中国大陸です。このエッセイを読んでいただいている方々には色染物質という特色から染色、染料あるいは繊維アパレル関連の仕事にて中国には長期にわたり、ビジネスの世界にてご活躍された方も多くおられると思います。当然小生のような短期間の物見遊山の旅行で訪れた現地案内話は、珍しくも無いとは思いますが、しばらくの間お付き合いいただければ幸いです。

また前回も書きましたが、小生現在高齢になるにつれてほとんど海外へは行けておりません、従ってこれらのご報告は時期的にも古い情報です、特に中国はここ近年の移り変わりが激しく国全体の変化が大きく、現在の状態を正確に記述しているものではありませんが、当時のありのままの姿を思い出しながら、ご報告させていただきますこととお断りいたします。それと記述順序は必ずしも訪れた順序と違っていることも含み置きください。



有名な万里の長城八達嶺、天下の絶景です

万里の長城最先端、天下第一関、海に出た先は老龍頭

今回の旅行は秦皇島、万里の長城の先端、最初の起点である「天下第一関」を訪れてみたいということで、案内できる中国の旅行会社を国内代理店通じて探してもらったのですが、なかなか見つかりません。当時としてはNHKで少し採り上げられるぐらいで、ほとんど日本人はじめ外国人の訪れる観光ルートからは外れています。やっとの事で北京の旅行会社の方で見つけてくれたのですが、現地秦皇島の国内旅行会社が案内できるが、日本人対応ができないという話になり、結局北京のガイドを伴って現地入りと成り、そして現地秦皇島での細かい案内は地元のガイドが北京のガイドへ解説それを訳してもらおうといった、結構手間に加えてとそれなりのガイドの出張

費、人件費、交通費が掛かってきます、それと中間手数料が上乗せに成り、おまけに北京のガイドもこの秦皇島は初めてだという、余分な費用の掛かった贅沢な旅行となりました。今なら直接受けてくれる観光会社も、いくらでもあると思いますので、安く行けると思います。

1. 古都洛陽を訪ねて

今回の紀行のプロローグは、どうしても見ておきたい万里の長城にからめて、以前から興味のあった中国3大石窟の一つ、龍門石窟（残りの石窟は敦煌莫高窟、雲崗石窟）を見ておきたいとのことで、かつての中国の首都であった洛陽からのスタートとなりました。

初日は北京経由で洛陽へ入り一泊、次の朝から洛陽観光その次の日は渤海湾に面する秦皇島（島ではありません都市名です）を訪問、長城の最先端を訪ね、最終日に北京に戻り、郊外の万里の長城八達嶺を見学とのコースとなりました。

洛陽は芥川龍之介の小説「杜子春」などでも登場する、日本でもおなじみの古都で中国の歴代国家の随、唐などの都が置かれていたところ。また日本の平安京が洛陽を原型として造られたことから「洛」は京都をさす雅（みやび）言葉とされ、「洛中」「洛外」、都の内側、外側の意味の「洛」はここから生まれたものです。

初日は北京経由国内線で鄭州（ていしゅう）の飛行場にはいります。中国語では ジアン ジョウと読みますが、洛陽にもっと近い飛行場です。洛陽で一泊、次の朝ここから今回の旅のスタートです。



白馬はこの寺のシンボルです

洛陽では最初に中国国内にて有名なお寺、「白馬寺」を訪れます。中国最古の仏教寺院で中国に初めて仏教が伝えられて、最初に建立したのがこの「白馬寺」で必ず観光コースには入っています。お寺に入ると境内でお年寄りの女性が数人集まって何やら井戸端会議中、その中



何やら井戸端会議、右の老女です

の一人で高齢の女性でしたが、ガイドに教えられて、纏足（てんそく）というのを初めて見ました。かつては足が小さいほど美人だったと、足が大きいとお嫁にも行けないという時代があったそうです。文献では知っていましたが、初めて見た纏足の女性、中国でも出くわすことが希になってきたそうですが、実際の真纏足が見られてラッキーとは言えない、何しろ歴史が歴史だけに、何か複雑な気持ちになるものです。



最近のTVで中国の昔の宮廷ド足先を注意してみてくださいラマなどを見ていると、皇帝に使える複数の夫人たちが立ち上がるシーンが有り、歩く際にお供がそれを支える場面が何度も出てきます。初めはわからなかったのですが、当時は宮中に仕える高貴な夫人たちは纏足であることが当たり前で、そのため歩行に支障が出たり、立ち上がる際によりめくなど安定を欠いたため、



白馬寺入り口、TV等の取材などでよく登場します

世話する女官がそれを支える必要があった、というシーンをこれらのドラマで演じているそうです。

ところで中国の有名な白居易の「長恨歌」という詩に、次のような一節があります。

・ **温泉水滑洗凝脂** [温泉水滑らかにして凝(ぎょう)脂(し)を洗ふ]

〈温泉のお湯はなめらかに美しい肌を洗う〉

・ **侍兒扶起嬌無力** [侍兒扶(じじたすけ)起こせば嬌(きょう)として力無し]

〈侍女が支えるもなよなよと力なく〉

過去には楊貴妃が纏足だったことを表しているなどの説がありましたが、最近の研究では楊貴妃が生きた唐の時代の初期の頃、纏足はまだ広まっていなかったそうです。とにかく中国では古代から女性は小さな足が美人の象徴で、なよなよと歩く若い女性に殿方は魅力を感じたことは間違いないようです。



この白馬寺に入る門前の土産物屋 **このサイズの石の4面に般若心経がぎっしり彫り込んであります**に中国おなじみの判子屋が店を開いていました、注文してお寺巡りを終えて帰りには彫り終わっているという早業で判子を作ってくれます。これまで空港やいろいろな土産物屋で判子を作りお土産に印鑑を買って帰りましたが、安くて重宝される土産として一番人気があり、丈夫で長持ちしてくれて、話題にも残るのがこの即彫り印鑑です。

特に渡す方の名前がわざわざ彫ってあるというのはそれだけ真心がこもるようです。この旅行記を読まれて中国に行く予定、行ってみようかななどとおもわれる方はこの即彫り印鑑をお土産にお勧めです。日本で別注の判子を作る相場から比べると随分安くて重宝されます、行く前に必ず渡す相手のフルネームも調べておけば間違いないです。但し石に彫る場合は芋彫り(凹)となる場合は印鑑登録はできません。頼めば可能であれば石、木製でも凸彫りはしてくれるようでした。

このときは石材に細かく「般若心経」が彫ってあるのを選び、即彫りで氏名を彫ってもらい買い求めましたが、今も重宝して使っています安くてこれは値打ちものです。

2. 龍門石窟

その後の観光はこの龍門石窟に移ります。中国3大石窟の一つ(敦煌莫高窟、洛陽の龍門石窟、大同の雲崗石窟)に数えられ、中国北魏時代の貴重な遺跡として、特にまたその仏教美術の価値は中国第一級の史跡にはいり、世界遺産にも登録され中国有数の観光名所に数えられています。この石窟についてはいろいろ研究がなされており、詳細を知りたい方はネット等で調べてみてください。

洛陽は我が国でも遣隋使、遣唐使などが訪れて、



入り口中央下に世界遺産登録プレートが貼ってあります



武則天の顔を模したとされる岩山に彫られた巨大な舎那仏

我が国にその文化を持ち帰った古くから縁の深い古都です。またその近くに開けた龍門石窟には石窟が2300以上もあり、主に仏像などを安置しておく役割を果たす仏龕[がん]（断崖を掘って、仏像などを安置する場所）は785もあります。そしてその中でも龍門石



窟における最大の石仏である、奉先寺洞の盧舎那仏坐像（675年完成）は中国初



めての女帝「武則天（則天武后）」の顔を模したものとされ、日本において奈良の大仏、盧舎那仏を建立するきっかけとなったものです。なおかつて古来は

石窟のすぐそばはかつての伊河の船着き場です「則天」と通称のみで姓名をはっきりさせず呼ばれてきましたが、現在の中国では姓を冠して「武則天」と呼ぶことが一般的になっています。

当時の遣隋（唐）使は船で黄河をさかのぼり、その支流「伊河」の川沿いに開けたこの仏教遺跡付近で船を降り都の洛陽に向かったものと思われま

す。余談になりますが、有名な王維の漢詩に出てくる、「渭城朝雨浥輕塵」（いじょうのちょうう けいじんをうるおす）「客舍青青柳色新」（かくしゃせいせいりゅうしよくあらたなり）に出てくる、渭城のそばを流れていた渭河（渭水）とは違います。こちらは西安の近くをながれ



る別の河です。



仏龕[がん]と呼ばれる仏像を安置する「窟」

各国の使者が都を訪れ、この船着き場についたところからこの大石仏群が見え始め、異国からの訪問者を出迎えるように、その中国の統一国家の圧倒感を見つけたのがこの大仏だったということです。おそらく当時日本からの派遣使節もこの光景を見て圧倒され、是非我が国にも大仏を建立しようと意気込んだことか



近づくとも圧倒されるとにかく大きな石仏群です

早速注文しました。そんなにおいしい料理とは言えませんでした。記憶しています、さらに頭ごとスープで出てきたのに2度びっくり。その場で鳥を絞めて料理



禁断の鳥？料理の食堂です

すると言
うこと
で、調
理場へ
行って
写真に
撮らせ
てくれ
と交渉
しまし
ましたが



鳥の頭がなぜか恨めしそうにこちらをにらんでいました

ダメ、何か曰く因縁がある料理なのかなーと。そのときはそれほど気にしなかったのですが、後でガイドに話したところ、大変貴重で珍しい鳥、捕獲禁止で食用はもちろん禁止、食べると罰せられますが、地元ではそのおいしさ故、闇で料理する店が後を絶たないそうです。日本で言えばツグミの様な禁食料理のようです。写真に撮らなかつた理由がこのときわかりました。何の鳥なのか一度調べておきますが、結構頭の大きさからして小型の鶏ぐらいだったと思います。ツグミのような小鳥ではなかつたです。



少林寺に入ったところの広場のパノラマ写真、とにかく広いです



たぶん絶滅種に指定されているのだとおもいます。旅先で犯罪になるものまで食してしまいましたが、時すでに遅し食べてからでは後も祭り、もう時効にはなってしまっていますが・・・



その後午前のスケジュールを終了、午後からは同じく洛陽近くの少林寺を訪ねるのが今日の予定でしたが、その前に途中昼食を済ませるために立ち寄った地元の食堂（レストランと呼ぶにはあまりにローカルすぎましたが）での話です。

何か地元の有名な珍しい料理を土産話に別注文で食べようかと店主に聞いてみると、地元では有名な（名前は控え忘れましたが）珍しい鳥料理があり、値段はこの店のメニューでは、一番高いとのこと。 「5人で割ればしれてるわ！」と

3. 少林寺を訪ねて



少林寺開祖「達磨大師」像

午後から観光に訪れた少林寺はもうほとんど町全体が、一種の大きなパビリオンのようになっていて、あちこちにお寺と道場のような施設とその関連の史跡

が点在しています。そして関連のお寺群に、少林寺拳法を学ぶ訓練道場のようなものがあり、町全



TV、マスコミ、ネットに出てくる有名場所です



少林寺拳法の披露というより演舞のショービジネスです

体が拳法一色に染まっている集落のような雰囲気、中国全土あるいは世界中から少林寺拳法を学びたいという若者が集まり、幼い頃から一種の学校のように全寮制で訓練を受けているシステムの様です。

また、観光コースもその中にも実演演技が組み込まれ、中央が舞台になった大きな体育館のようなホールに団体客を入れて、1時間程度の少林寺拳法のショーを観光客向けに見せます。少々金



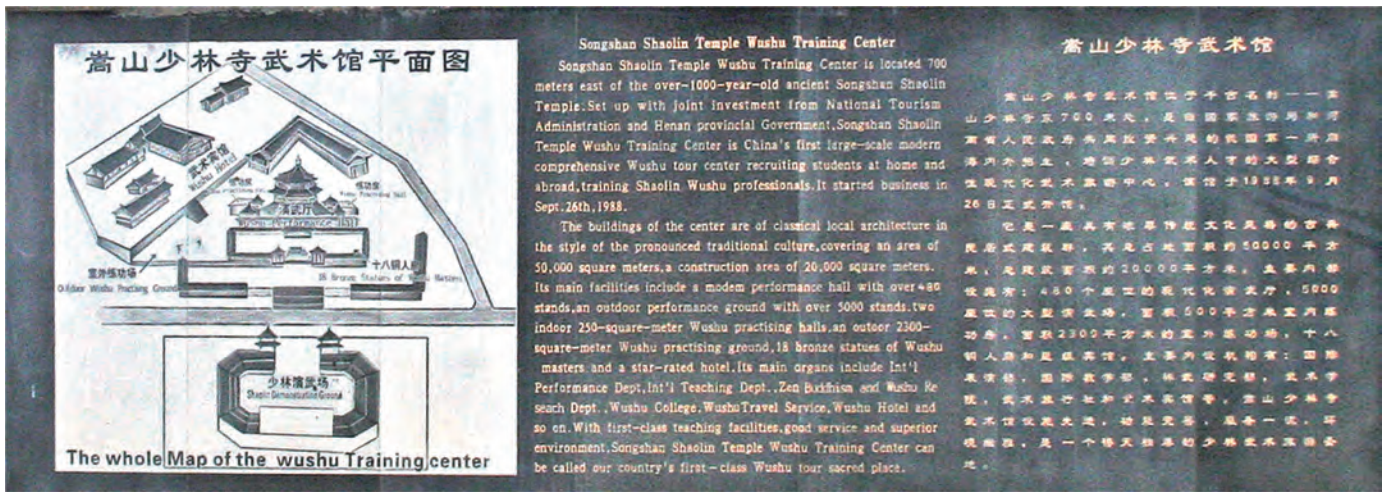
儲け主義に走りすぎたショー拳法を見せてもらい、これは興ざめになってしまいました。それにたまたまですが、アメリカのTVの取材チームも同席してショーを撮影していました。アメリカ人にとってこの少林寺は映画にも出てくる興味のある武術の一つで大変本国でも人気があるのでしょう。

説明によるとこれらの学校に入るには何倍もの競争を勝ち抜かないと入門できない、あこがれのコースらしいです。ちなみにガイドに、高校や大学など行かないで拳法の免許を取ったりあるいはこの学校を出

て、将来は何になるのかと聞いてみましたが、それによるとこれらの学校を卒業すると大企業の警備主任とかになるのが約束されていて高給がもらえ、将来警備の責任者の地位が保証されていて、常にあこがれの職業らしいです。

この少林寺の観光を済ませて、予定では夕方には北京に入り、翌日は今回の第一番の目的、万里の長城の突き出た最先端、秦皇島を旨ざして北京入りする予定でしたが、その際になかなか体験できない、ちょっとしたハプニングが起こりま





この地図を見ていただければ分かるほどデカイ敷地です、ちょっとした遊園地並みの少林寺ランドです。

この後、少林寺探索を最終に本日の予定していた観光を全て終わり、夕方鄭（てい）州の空港から北京に向けて国内線のフライトにて夜7時頃には北京に移動します。そしてホテルに帰って翌朝は早朝から運行が始まったばかりの高速鉄道（中国版新幹線）に乗って、次の目的地である秦皇島に向かう予定をしていますが、鄭州空港で飛行機に乗って席に着いたとたん、いざ出発の状態です突然乗客が降り始めます。一体何が起こったのかわからず、当然アナウンスも国内線のため、中国語で何やら言っていますがよくわかりません。すでにガイドとは鄭州空港で分かれて電話翻訳もできません、残ったのは我々グループだけ、あつけにとられてそのまま座っていると、



こんな立派な鄭州空港に英語を話せるスタッフが居ないんですから、地上スタッフに片言の英語で聞いても、全く英語が通じません、国内線で英語のできるスタッフは居ないのかと聞いても、パイロット以外は地上勤務、アテンダントも全員英語ができないのです。信じられませんが、こんな立派な空港なのに英語のできるスタッフが全く居ないのです。このときに限って、空港で分かれたガイドの携帯番号も聞いておかなかったので連絡もつかず、翻訳もままならず困り果てると、ようやく地上スタッフが乗客で香港

ようやくパイロットが日本人だと気づき、英語で「ベージン（北京）、バッドウェザー」とだけ言ってくれて、どうやら現地が悪天候で、飛び立っても北京に着陸できないことが判明します。そのまま鄭州空港で足止めとなりました、北京行きの大勢の客（全員我々以外中国人です）が足止めとなりましたが、日本人は我々グループ5人だけ、ロビー放送を聴いても言葉がわかりません、地上案内も中国語のみ英語の放送もありません。一体いつ飛ぶのか、欠航のままなのかさえもわ



足止めの長丁場に備えての配られたサービス弁当です



經由アメリカ帰りの客を一人見つけてくれて、英語で通訳してくれるとのこと、こちらも片言しかわからない程度でしたが、ようやく北京の国際空港で雷雲、豪雨が発生して悪天候で全飛行機が全く着陸できない状態で、国際線に至っては空中待機を余儀なくされていて、天候が回復し着陸が確認できるまでしかも国際線優先でそれが終わるまで飛ばないことが判明しました。鄭州ー北京は数時間のフライトですが国際線の全着陸が完了するまで離陸を見合わせるとのことです。

こうなればいつ飛ぶか分からない？この体制で腹ごしらえ しばらくすると突然他の便の客でしたが一斉に歓声を上げて喜び出すしまつ、何が起こったのかわからなかったのですが、どうやら特定のフライトがキャンセルで、鄭州のホテルで宿泊してもらおうらしいです。食事もついているのでしょうか、フライト中止でラッキーとなったとの歓声です。しかしながら、我々は明日朝一番、北京発天津行きの新幹線の移動を決めているので、どうしても今晚中に北京入りせねばなりません。そのうち、我々の便はどうやら待てば飛ぶらしいという事がわかりだしてきました。しばらくすると長丁場を覚悟せよと言わんばかりに夜食の弁当が配られてきて、ようやく深夜までフライトできないとわかります。待たされ続けてフライト開始のアナウンスがあったのが夜11時過ぎだったと思います。本来なら7時には北京入りして食事もすましホテルで風呂に入りゆっくり過ごす時間です。深夜2時前だったと記憶しています、ようやく日付も変わり北京空港に降り立ちましたが、やっとの事で到着かと思いきや、そうはいきません。



もちろん一斉に北京上空や国内他の空港で待機していた飛行機が降りはじめ、空港ゲートはラッシュ状態、今度は飛行機のタラップから降りて乗ったバスが滑走路ゲート付近で動かなくなりました。バスに乗ったままストップが掛かってしまい、移動バスの中で缶詰になったのです。これが結構長時間続いたのですが、日本人ならどうせ到着ゲートが一斉になって大混乱、解消するまで根気よく待つのですが、そこは国民感情の差、一斉に客が運転手に向かってののしり出す次第、しまいにはどんどんバスの車体をたたき出す始末、騒いだところでゲートの方でコントロールしているのでどうしようもないのですが、そこは感情

休憩で寄ったホテルの英語ですらこのレベルです 抑えられないのが中国人の気質、騒動はどんどんエスカレートしていく一方、待ちに待たされてやっとなつた北京が目の前に見えているのに、バスから出られない、閉じ込められたまま空港の滑走路に止まったまま、焦る気持ち、怒る気持ちはわかりますが・・・2～30分が過ぎてくると騒ぎが沈静化するどころか益々エスカレートしてきます。今度は乗客全員でバス全体を揺すりをはじめ、バスは大きく揺れだします。さすがに恐怖を感じる一瞬でした、思わ



早朝の北京駅、多くの人でごった返しています



ずあの天安門事件が脳裏を横切った瞬間でした。そのうち声もどンドン大きくなりますが、なにせ中



北京駅中央コンコース、ばかでかい吹き抜けです 国語はちんぷんかんぷん、おそらく早く降ろせと騒いでいるのだと思います。騒ぎ出して3~40分以上経過したと思いますようやく到着ゲートまでたどり着き無事解放、時間は深夜2時を過ぎていました。果たして北京の次のガイドと遭遇できるか、時間が時間だけに帰ってしまっているんじゃないかと心配していましたが、そこはプロです、待っていてくれました。ありがたいことですやっと言葉が通じ安堵のひとつときでした。

ホテルに着いてようやく入浴、寝床に入ったのが3時過ぎだったのを記憶しています、翌日は7時に迎えに来る予定6時には起床、朝ご飯はホテルに頼んでサンドイッチか何か作ってもらうよう頼んで寝ましたが、数時間ほどの仮眠となってしまいました。旅行先で言葉が通じない、片



言英語さえ出できれば世界中の旅行先など、なんとかなるだろうというのはこの中国では全く誤った妄想であることを実感しました。そういえば、この国で英語は長い間敵国言葉です、イギリスとの戦争では国の一部を99年間租借され、アメリカとは蒋介石率いる国民党政府いわゆる中華民国と敵対する立場で、またその根源となった台湾問題ではいまだにトラブルを引きずっています。敵対する国の言葉である英語の学習など、全くやってこなかったのがこの国の実態のようです。いつだったか忘れましたが、

映画の1シーンに出てきそうなばかでかい北京駅ホーム たぶん四川省奥地の観光地の道すがら、アパ・チベット族の土産物屋にトイレ休憩で立ち寄った際です。売店の女性と話をしている聞いた話ですが、もちろん日本語です・・・日本人の観光客相手です、どこで勉強したのか日本が結構上手に話せます。土産物の売店で日本語ができると給料が倍以上違うらしいです。その話の中で、中国の奥地へ行くと高齢者はアルファベットそのものを習ったことがない、つまりabcが読めないんです。我々の大半がハングルを初めアラビア語の文字や、タイ語の文字を読めない感覚です。中国で英語が通じないというのを実感させられました。



そういえば北京オリンピック会場のアナウンスは、数力国語での紹介する際に自国語が最初、英語は常に最後だったような気がします。この国の英語に占める重要性はこの程度の位置づけです。

和諧とはハーモニーの意味、世界中の最先端の高速鉄道技術の良いところ取りの寄せ集め、パクリ号の方がいいのでは

この事件以来、独学ではありますが帰国後、中国語会話のDVD等も買い求めて60の手習いならぬ、片言の旅行会話や普段の挨拶程度ぐらいできるようになった次第です。

そういえば我々が学生だったころは中国語といえば学ぶことはおろか、その教材すら売ってないなど手に入らない時代がありました。漢文は習っても中国語は読めないし、中国語を聞いても意味は理解できない。漢文の先生ですら中国語は話せない、国交のない国の会話を習おうかという人もいない、ないないづくしの時代でした。



朝の秦皇島駅前、この国では当たり前光景



鄭州は簡体字でこのように「郑州」と書きます
なれてくると元々は漢字の国、読め出します

漢文の授業を何年も習ってきたにもかかわらず、一体この学問は何だったんだろう。この中国では何の役にも立ちません。いっそのこと本国ですら忘れ去られつつある、中国では古文のような漢文学を日本で教えるなら、今現在使っている簡体字の一文字でも教える学問こそ役立つのではないかとも思います。この件があつて以来、ひしひしとそう思うようになりました。

最も近くにあつて遠い国、月にまで人類を送り込んでいた時代であっても目先の中国には自由にいけない、簡単に入国できない時代がありました。今は随分変わったものです。そんな歴史上のいきさつを現在に引きずっているのが現実の姿です、この英語文化が通じない中国の奥地の実態と言えます。ところで、特に土産物屋などで、こちらが片言でも中国語で話しかけると、やはりそれなり相手も警戒を怠らない態度に変わり、いい加減なもの売りつけ後は知らぬ顔、存ぜぬというのはさけるようです。

店員同士のひそひそ話も内容がばれると思って警戒します。相手にとってちょっとでも中国語が出てくると、この人はどれぐらい話したことを理解するのだろうかという尺度はすぐにはわからないので、それなりの対応に豹変します。少しは現地の言葉も話せると多少なりと旅行先でメリットもあります。取りあえずこの一日は大変な一日でした、忘れられない多くのことを経験し、英語は世界共通言葉の伝説を打ち砕かれ、英語さえ通じれば世界中どこでも行ける等の神話が崩れ去ることをひしひしと感じさせられました。



秦皇島駅ロビー待合室、普通のローカル駅ですがこの広さです